尋常修身教科書

卷三

3
40

検定合格本

K1201
75a
3

樋口勘次郎
野田瀧三郎 合著

尋常修身教科書 卷三

東京 金港堂書籍株式會社

目録

御盛德 一
今上皇后陛下 二
楠木正成卿(一) 三
楠木正成卿(二) 四
楠木正成卿(三) 五
楠木正成卿(四) 六
楠木正成卿(五) 七
楠木正成卿(六) 八
楠木正行卿(一) 九
楠木正行卿(二) 十
忠孝 十一
渡邊崋山先生(一) 十二
渡邊崋山先生(二) 十三
渡邊崋山先生(三) 十四
渡邊崋山先生(四) 十五
渡邊崋山先生(五) 十六
紫式部(一) 十七
紫式部(二) 十八
紫式部(三) 十九
女子の心得 二十
熊澤蕃山先生(一) 二十一
熊澤蕃山先生(二) 二十二
熊澤蕃山先生(三) 二十三
熊澤蕃山先生(四) 二十四
公益 二十五
外人と交る心得 二十六
共同衛生 二十七
國民の務 二十八

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ敎育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名　御璽

一　御盛德

御製

いにしへのふみ見る
たびに
おもふかな
おのがをさむる
國はいかにと

二　今上皇后陛下

皇后陛下の御德のすぐれさせられたることは、ここに、一々、いひつくしがたし。

學問のことに御心を用ゐさせられ、しばしば、學校に臨ませ、生徒を勵ましたまふ。

ことに、あはれみの御心深くおはしまし、不幸のものを御すくひ遊ばされ、又、しばしば、赤十字社などに臨ませたまふ。

御歌

あやにしきとりかさねても
おもふかな

寒さおほはんそでもなき身を

三　楠木正成卿㈠

楠木正成卿は河内の國の人なり。幼くして學問を好み、又、體力をぬられしかば、その名、早くより、世に聞えたり。八尾顯幸といふ人、かかるものの、我がとなりにあるは我が爲めによからずとて、ひそかに、人をやりてさし殺さんとせしが、かへりて、卿に捕はれたり。

顯幸、ますゝ、おそれ、兵をむけんとす。正成卿、之を聞き、父にすゝめて、我より、きゅーに、おしよせられしかば、顯幸、うろたへ、大いに破れてにげ走れり。

先んずれば人を制す。

四　楠木正成卿(三)

顯幸、正成卿の父の失せられしにつけこみて、せめよせければ、正成卿、志貴(シキ)彌太郎にふせがしめしに、身方、打ち負けたり。志貴は腹かき切りて申しわけせんとしたるに、正成卿「勝敗は兵家の常ぞ。後の功名を心がけよ。」と、よき馬を

與へられぬ。

志貴はその恩にかんじ、次の戰には敵將長瀨(ナガセ)七郎をとりこにしたり。正成、長瀨のなはをときて、人、各、その主の爲

めにす。我、汝をとがめず。とて、ねんごろに、いたはり、はなちかへされしかば、敵も身方も、ひとしく、かんじて、心をよするもの日に多くなれり。

仁者に　敵なし。

五　楠木正成卿(三)

楠木正成卿、後醍醐天皇の御めしによりて、笠置山に參りしに、天皇は北條高時を亡すことをまかせたまひたり。

このとき、正成「だとひ、高時、いかに無

法をいたすとも、臣の生きてあらん程は、決して、大御心を痛めさせたまふまじ」と、御こたへ申し上げたり。

六　楠木正成卿(四)

正成卿、國にかへりて赤阪に城をつくりしに、敵は、早くも、大勢を以て攻めよせたり。されど、正成卿は、はかりごとを以て之を却けられたり。

この時、笠置(カサギ)陷り　天皇は隱岐(オキ)に流されたまひ、しかして、正成卿、たくはへの食物つきしかば、死したるまねして赤阪の城をすてられたり。

後、又、兵を集めて金剛(コンゴー)山に立てこもられしかば、敵四方より來りて攻めた

れど落ちず。そのひまに北條高時、つひに、亡されたり。

七　楠木正成卿（五）

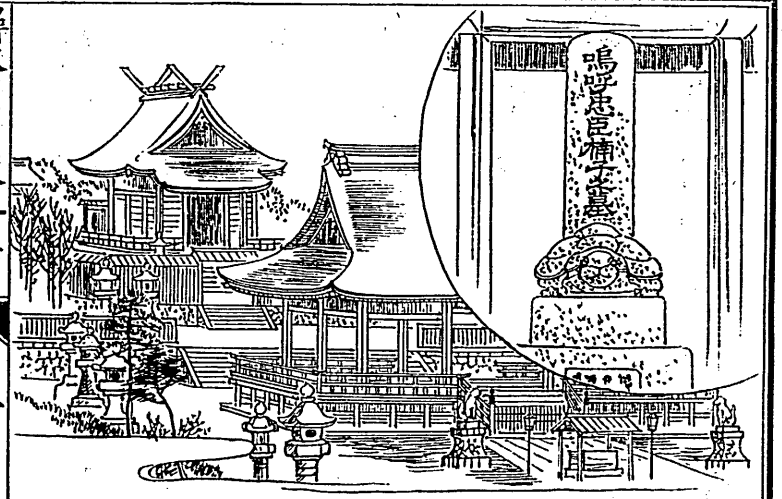
足利尊氏（アシカヾタカウヂ）　天皇にそむきしかば、正成卿は新田義貞（ニッタヨシサダ）等と、度々、その兵を破りたり。然るに、尊氏、九州の兵を以て攻め上る由聞えければ、はかりごとを進

めしかども用ゐられず、よって、打ち死にとかくごして兵庫にむかはれたり。

櫻井驛にて、子の正行に教へさとしていはく「汝、幼くと

も、我がことばを忘るるな。我、打ち死にせば、尊氏ますます、あくじをなし　天皇、いたく、大御心をなやましたまはん。汝、我に代り賊をうちて、大御心を安んじ奉るべし」とて、河内の國にかへしたり。

八　楠木正成卿（六）



正成卿、進んで湊川にいたり、小勢を以て大敵と目ざましき合戰せられしが、のこる身方は數少く、その身も多くのきずを受けられ

たれば、弟、正季にむかひ、「今はこれまでぞ。この世に七度生まれて賊を亡さん。」とて、にっこと笑ひ、二人さしちがへて果てられたり。

後の人、ここに、石を立てて「嗚呼忠臣楠子之墓」と題したり。明治の御代に至り湊川神社をたてて、卿をいつきまつることとなれり。湊川の流れは涸るとも、卿が忠義のほまれは、世々を經てつくる時なし。

九　楠木正行卿(一)

楠木正行卿は櫻井驛より國に歸りて、父の遺言を母に申し上げられしが、程なく、尊氏より父の首をおくり來れ

り。

正行卿、かなしくて腹かき切らんとせられしに、母はその手にすがり「父上の汝を歸したまへるは腹を切れとの爲めにあらず。父なき後は君の爲め、國の爲め、つくさしめんとてなり。汝は、早くも、わすれたるか。」と、さとされしかば、

正行卿大いにさとられて、これより後は遊びごとにも、朝敵、尊氏を打つまねして、しばしも、父の遺言をばわすれざりき。

十　楠木正行卿(二)

正行卿、成人の後、吉野に參り、處々に出でて、しば〳〵、敵を破られしかば、尊

氏、大いに驚き、高師直（コーノモロナホ）を大將として、大軍をさしむけたり。

卿は、之を聞きて今はかうとかくごを定め、先づ、後醍醐帝の陵（みさゝぎ）にまうで、又、かりの皇宮におもむき、今の天皇を拜して御いとまごひ申し上げ、それより、四條（シジョー）畷（ナハテ）に至りて、じんをとられたり。

やがて、師直の大軍來りしかど、之を物ともせずして切りまくり、ほとんど、師直をえんとせしが、わづかにして、と

りにがし、その身もきずを多くうけしかば、つひに、打ち死にせられたり。時に年二十四歳なりき。

十一　忠孝

我等日本國民と生まれたるものは、いかでか、君の御恩をわするべき。我等の先祖も、君に忠をつくし奉りたりされば、我等も、亦そのごとくせざるべからず。

君につぎては父母に孝をつくすべし、忠と孝とは人の最も大切なるおこなひなり。

すめらみくにのもの、ふは、いかなることをかつとむべき。

金港堂書籍株式會社

たゞ身にもてるまごころを、
君と親とにつくすまで。

十二　渡邊崋山先生(一)

渡邊崋山先生は、幼き時より孝行の心深かりき。父はながの病氣なりしが、その間、一日もおこたらず、手足をもみてかいほーせられたり。

父なくなられて後は、父のすがたの忘にうつしたるを床にかけ、朝夕、之に向ひて御禮をなされたり。

十三　渡邊崋山先生(二)

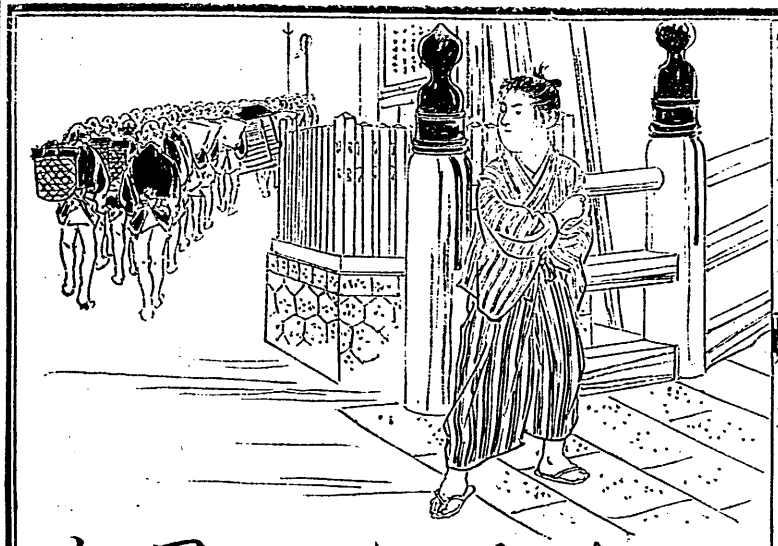
先生は、たゞ孝心深かりしのみならず、又、兄弟のじょーにあつかりき。先生の家はまづしかりしかば、兄弟、ことゞくくうちそろひて、一家に住まふこと出來がたく、みな、それゞゞ、ほーこーに出でたり。

末の弟のほーこーに出づるとき、先生、ことに、之をあはれにおもひ、雪のいたくふる中をもいとはず、弟をいたはりつゝ、板橋（イタバシ）といふところまで見送られたり。

兄弟に友。

十四　渡邊崋山先生（三）

先生十二歳のとき、町中をあるきて



ふと、大名の行列にあひ、じゃまなりとて、その先どものものにうたれたり。

先生、おもふよー、同じ人間にてありながら、かかるはづかしめをうくるも、つまり、我に一かどのすぐれたることとなければなり。されば、これより奮發して、我も、世に知らるるほどのものとならん、とて、ここに、はじめて、志をおこされたり。

十五　渡邊崋山先生(四)

先生、名かきにならんとて、ある名し

の弟子になられしが、家のまづしさに、禮物など十分にすること出來ざりしかば、つひに、ことわられたり。

先生、大いに力をおとしたりしが、かほどのことにて、ひるむべからず。と、父よりはげまされしかば、別によき師をえらびて、ひたすら、べんきょーせられたり。

十六　渡邊崋山先生(五)

先生いよ〳〵、貧しくて紙筆などをかふことだに出來ざりしかば、かきたる品をうり、そのぜににて、やう〳〵、これらを買ひとゝのへられたり。

かかる困難にあひても少しも屈せ

ず、ますし、業をはげみ、たゞ、ゑのみならず、學問にも志したり。されど、十分のひまなかりしかば、毎朝、めしをたきながら、本を讀まれたり。かくのごとくにして、つひに、世に名高き人となられたるなり。

かんなん、なんぢを玉にす。

十七　紫式部（ムラサキシキブ）（一）

紫式部は藤原爲時のむすめなり。兄弟四人にて、皆、人にすぐれたりしが、中にも、式部は一きは立ちまさりたり。幼

き頃、兄が父より書物を習ふをかたはらに居て、よく聞きおぼえ、兄の忘れたるところなどは、それを教へたるほどなり。

されば、成長の後は、いろ〳〵の書物を讀みて、物事にあかるくなり、男子も及ばぬ程の學者となりたり。

十八　紫式部(三)

式部は藤原宣孝(ノブタカ)のつまとなり、よく、しうとしうとめに事へ、夫を大切にしたり。もとより、物事をわきまへ、才もた

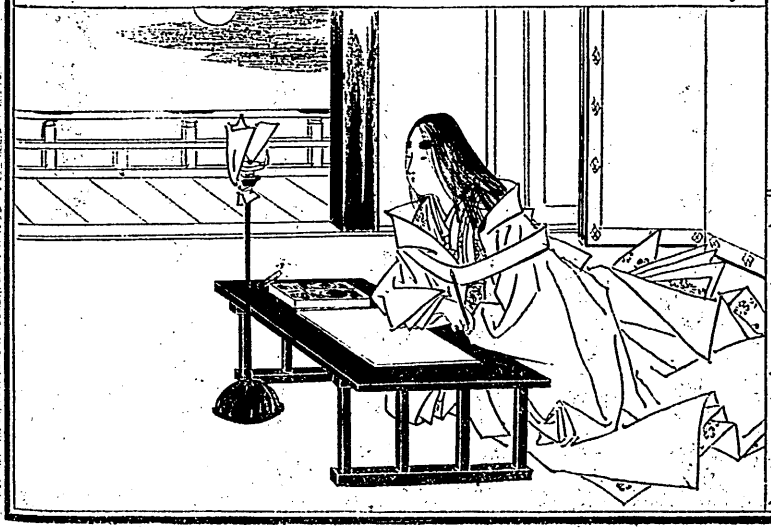
けたれば、よく家事を治め、よく子をそだて、その外よろづにつき、女の道を守りたることといちじるし。後、夫病にかゝりけるに、式部がかいほーのねんごろなること世の常ならざりしが、そのかひなくて、つひに、失せたり。この時、式部は年、まだ若かりけるが、かたくみさを

を守りて、又、夫をもたざりき。

十九　紫式部(三)

式部、かく、何事にもすぐれたりしかど、少しも高ぶることなく、一といふ文字をだに知らざるものの如くなりき。式部は源氏物語といふ書を著しけるが、ある時、一條(イチデウ)天皇ごらんじて、「この書

を著したるものは、日本紀にくはしとおぼゆ。」と、仰せられけり。これより、人々、式部を日本紀の局とよびて、ほめそやしけるを、式部は、か



へってはぢ居たりといふ。

能あるたかはつめをかくす。

二十　女子の心得

女はやさしく、人にへりくだりて、おごり高ぶらず、常につゝしみの心あるべし。人の妻となりて後は、ことに、柔和の德を守りて、夫をうやまひ、しうとし、し

うとめに孝をつくすべし。

二十一　熊澤蕃山（バンザン）先生㈠

熊澤蕃山先生は中江藤樹（トージュ）先生の弟子なり。わかきころ、人の、藤樹先生のことをかたるを聞きて、したはしく思ひ、たゞちに、ゆきて、弟子となしたまはれと、ねがひたり。

藤樹先生「私は人の師となる程のものにあらず。」といひてことわられしを、なほ思ひ止りがたくて、二日の間、のきの下に、ゐすわりて、

しきりに、ねがひつゝひに、聞きとゞけられたり。

二十二　熊澤蕃山先生(二)

蕃山先生は、わかきとき、からだこえふとりて、たちゐじざいならず。よって、自らかんがへて「武士が、かよーのからだにては、物の用に立ちがたし。

これは、必ず、身のあんらくなる故なるべし」と、思はれたり。これより、わざと、そまつなる物を食ひ、よるひる、武げいをはげみ、又、をりを

りは、野山にかりをするなど、つとめて、からだをこなすことをつとめられたり。

二十三　熊澤蕃山先生(三)

蕃山先生は藤樹先生の教をうけて後、故郷に歸られ、なほ、學問を勉强せられしが、後備前侯の家老になられたり。

蕃山先生、常に、藤樹先生の恩を思ひて忘れず。をり〳〵、そのきげんをうかがはれたり。又、かつて、侯に、先生をまねかんことをすゝめられ、侯も、その言を用ゐて、藤樹先生にいひ入れられしに、先生、病の爲めにことわられしかば、蕃山先生、すなはち、藤樹先生の子を侯に

すゝめられたり。

二十四　熊澤蕃山先生(四)

蕃山先生、家老となりてより、或は貧者をめぐみ、或は善行をあらはす、など民を治むることに、よく、心を用ゐられたり。

岡山地方は、年々、洪水の害ありて、人民くるしめり。先生、その地を、あまねく、見分せられて、はげたる山に木を植ゑしめ、又、みだりに、木を伐ることをやめさせしかば、數年の後、洪水の害おのづからなくなりたり。人民、今に至るまでその恩德をかうむれり。

二十五　公益

人はたゞ私の爲めのみをはかるべからず。世の爲め、人の爲めにもつくすべきなり。又、たゞに、目の前のことのみに心を用ゐるべからず。すべて、後々の爲めになることをも心がくべきなり。

蕃山先生の、山林をやしなひて、治水の本に力を用ゐたるがごときは、まこ

とに、公の爲め、後々の爲め、大なる益をはかられたるものなり。

二十六　外人と交る心得

明治三十二年七月より、内地雜居とて、外國人も日本國中いづくにても、自由に、居住することを許されたり。

すべて、これ等の外人は遠き國より

來れるものなれば、親切にとりあつかふべし。決して、無禮のことをなすべからず。又、かれに對して、我が國のたいめんにきずつくるが如き行を爲すべからず。

二十七　共同衛生

我等は、よく心をつけて、一人のおこたりより、多くの人々を病氣にかゝらしむるが如きことなきよーにすべし。

その二三の心得をいはん、

一、家の内外をきよくすべし。

二、きたなきものを、道又は、池川にすつべからず。

三、はやりやまひにかゝりたるもの

金港堂書籍株式會社

あるとき、之をかくすべからず。

四、病人の用ゐたるよごれ物を、近邊の地、又は、川などにすつべからず。

二十八　國民の務

我等が、安く、世をわたることを得るは國におきてある故なり。故に、我等は、皆、國のおきてを、大切に、思ひて、之にしたがふべきなり。

おきての中にて、人々の、大方、たづさはるべきものは、ぜいををさむる事と、兵役に出づる事となり。ぜいををさむるは國のひよーを出す爲め、兵役に出づるは國を守る爲めなり。これ等は決しておこたるべからず。

明治三十四年五月十四日印刷
同三十四年五月十七日發行
同三十四年七月二十三日訂正再版印刷
同三十四年七月二十七日發行

常修身教科書
定價（入門　巻一　金八錢　巻二　金八錢　巻三　金十三錢　巻四　金十三錢）

著作者　樋口勘次郎
著作者　野田瀧三郎
發行兼印刷者　金港堂書籍株式會社
東京市日本橋區本町三丁目十七番地
代表者　右社長　原亮一郎
東京市下谷區龍泉寺町四百十四番地
賣捌所　各府縣特約販賣所

著作權所有

◎弊社ハ常ニ書籍ノ用紙印刷製本等ニ注意シ勉メテ其ノ堅牢ヲ期セリサレド多數ノ中萬一學年間ノ使用ニ耐ヘザルガ如キ粗製ノモノアラバ御通知次第無代價ヲ以テ御引換申スベク候

◎本書ハ僻遠ノ地ニ至ルモ定價ヲ超過シテ賣捌カシムルコトナキハ勿論直接ノ御注文ハ多少ニ拘ラズ運賃ヲモ負擔仕ルベク候